

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：14403

研究種目：奨励研究

研究期間：2020～2020

課題番号：20H00798

研究課題名 災害時にリーダーシップを発揮できる生徒の育成を目指す避難訓練の実践的研究

研究代表者

廣瀬 明浩 (HIROSE, Akihiro)

大阪教育大学・附属学校園・副校長

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 460,000 円

研究成果の概要： ①今後、本研究を発展させるために、本研究を軸としたカリキュラムマネジメント（以下、カリマネ）を行うための資料収集を目的とした学校視察を行った。カリマネのスタートに当たって明確化させたり学校関係者間での情報共有すべき視点を理解することができた。

②大阪で生活する生徒がもっておくべき防災的知識として、活断層地形である上町台地の成因と実際の地形を、紙上学習と現地調査を往還させることによって生徒に深く理解させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、感染拡大防止のために宿泊型の避難訓練を実施できる状況にはないが、宿泊型避難訓練を中止に据えた防災・減災教育を軸としたカリキュラムマネジメントを実践することによって、防災・減災的視点をもった生徒を育成することが期待できる。これら生徒は単に訓練経験があるだけでなく、活断層の成因など基礎知識面でもよく理解している可能性が高いため、万が一一大規模な災害に遭遇した場合でも、それぞれの居住地域において訓練経験や基礎知識を基にした、ケア活動を行うことが期待できる。

研究分野：防災

キーワード：防災 減災 避難訓練 リーダーシップ

1. 研究の目的

申請者が勤務する大阪教育大学の天王寺地区附属学校は、小・中・高が近接した立地となっており、その中でも附属天王寺小学校（以下 附小）は地域の避難所に指定されている。したがって南海トラフ地震など大規模災害の発生時には、多数の市民が附小へ避難してくることが予想される。この場合、附小の児童たちが附中高の校内施設に一時的に避難することも十分考えられ、中高生が自分たちだけでなく、小学生の世話をしながら避難や待機することが必要となる。

一方で、こうした大規模災害において校内に滞在・宿泊することになった場合について、不自由な生活に対応する方法や、教員による誘導・指導のありかたについては、実践的研究が十分ではない。こうした現状に鑑み、本研究では短期間・小規模の滞在・宿泊型避難訓練を、小・中・高生が混合された班編制で実施することを通して、上級学年生徒のホスピタリティ能力やリーダーシップ能力を育成するための実践的研究を行う。

2. 研究成果

(1) カリキュラムマネジメント（以下カリマネ）に関する学校視察

2020 年以降の 2 年間はコロナ禍にあったため、申請時に予定していた「人を集めての活動」は悉く実施できなかった。本実践研究を本校のカリキュラムの軸として継続的に実施していくため、カリマネの実践に関して先進的な実績を上げている学校を訪問した。訪問校は山口県山口市立平川中学校を訪問し、カリマネの実態を見学・聴取した。

■日時：令和 3 年 12 月 17 日（金）9 時 15 分～11 時 00 分

■応対者：山口市立平川中学校校長 津守真治様
山口市立平川中学校教頭 藤田 猛様

■平川中学校のカリマネの歩みについて

まず藤田教頭から、『カリマネ研修の歩み』と題した約 60 頁の冊子資料にもとづいて、平川中学校のカリマネの歩みについて説明していただいた。平川中学校のカリマネは、次の三つの課題を出発点としている。

- ①学習面での言語能力（自分の考えを持つ、他者に説明する、表現する等）の課題。
- ②生徒指導面での SNS 上や学校生活での不用意な発言によるトラブルの増加。
- ③地域の特徴である外国にルーツのある生徒への対応。

また、数年前まで生徒の問題行動が多発していた（いわゆる「荒れていた」）時期があり、当時から在籍している教員たちの問題意識もあった。

そこで平川中学校は、「言語能力の育成」を中心軸とし、さらに同校が以前から取り組んできた「地域との連携」をより推進していく方向でカリキュラムの作成に着手した。そこには、生徒と生徒、生徒と教師、生徒と保護者・地域の方とのあいだに「会話が生まれるように」という意図が込められている。カリキュラムの作成においては、これまで行っていた地域との連携活動を洗い出しさらに充実させていくこと、校内研修で教職員の共通理解を丁寧に図ってきた。

事業 2 年目の令和 2 年度には、新型コロナウイルスの影響を受けるなか、教職員や地域とビジョンを共有しながら実践を重ねていった。教科横断型の授業に関しては、「コロナ」をテーマにして各教科で授業を開発し、校内研修で教科横断的な学習プログラムとしてまとめた。また小・中・地域（家庭も含む）で連携して平川学区の子どもを育てていく「グランドデザイン」を作成し、学区全体でビジョンを共有しながら取組を進めてきた。「言語能力の育成」に向けた授業づくりとしては、育成すべき資質・能力を「表現する力」「きく力（まとめる力）」「主体的に学ぶに向かう態度」と定めたうえで、「インプット→アウトプット→モチベーション」というサイクルを各教科で共有し、日常の授業・単元の展開に取り入れ、研究授業で作成する指導案にも取り入れることで、授業改善を図っている。

藤田教頭の説明を受けて、質疑が行われた。視察者側からは、外国にルーツのある生徒について、校内の研修体制について、地域との連携について質問がなされた。藤田教頭からは、外国にルーツのある生徒は、近隣にある山口大学の留学生（中国やモンゴル等のアジア諸国）の子どもたちが多く、週に二回の日本語指導が行われている。校内研修体制では、これまで研修のリーダーシップをとっていた藤田教頭に代わり、教務部がカリキュラム・マネジメント研修を担当するようになっている。また地域との連携については、「地域連携プロジェクト部会【案】」が立ちあげられ、地域連携事業と校内での担当者が組織されてきている、と回答があった。

■ヒアリング

学校見学・授業見学を経て、質疑応答を行った。

Q1：地域との連携は、公務分掌に組み込まれているのか？

A1：地域との連携は、それぞれ「プロジェクト・ベース」で動いているので公務分掌には組み

込んではいない。「地域連携プロジェクト部会【案】」にあるように、プロジェクト担当を校内で決めて、それぞれで動いている。

Q2：カリキュラム・マネジメント研修を行うときは、教員はどのような座席で行っているのか？教科ごとで座るのか、異なる教科で集まって座るのか、学年で座るのか？

A2：研修は職員室で行っていて、職員室は学年集団で机を配置している。

Q3：カリキュラム・マネジメントを行う際に、地域の方の声はどのように集めているのか？

A3：1年に1回、8月に小・中・地域での合同研修会を行っている。また1年に3回ほど地域の方が参加する「地域参加型道徳」を実施している。また行事が地域の方とお話する機会になっていたり、地域の方との飲み会の機会もあり、地域の方々の想いを聞く機会になっている。

Q4：地域との連携をどのように始めたらよいのか？

A4：まず地域の有力者、動ける人、自治振興会等にアプローチする。山口県には「地域連携コーディネーター」が置かれ、自治体の教育委員会から委託された方が活動してくださっている。コーディネーターを養成するセミナーも開催されている。本校にかかわっている地域コーディネーターの方は、元PTA会長の方で、様々な意味で地域とのパイプになってくれている。

Q5：PDCAの「Check」から「Action」について、どのように生徒の姿を評価し、教育改善を行っているのか？

A5：学期に1回、「授業評価表」（資料4）を用いたアンケートを行っている。アンケートの結果は集計して校内研修で検討している。

(2) 上町台地の巡検

■目的

天王寺周辺の上町台地および上町断層に関連する地形・地質・施設を観察・見学し、活断層型地震の発生メカニズムやそれに伴う地形の形成に関する基礎的な理解を深める。

■日時

令和4年2月6日（日）

10:00～12:00 事前学習

13:00～16:00 巡検

■巡検範囲（右図）

JR大阪環状線桃谷駅周辺を出発し、天王寺区細工谷に残る浸食谷に沿った道路を北上した。上町台地東側斜面を西進し、上町台地の尾根部分に到達した。その後、台地西側の急坂を何度か上り下りしながら「天王寺七坂」や古代から残る斜面林の観察を行った。同時に上町台地に関連する社寺の見学を行いながら天王寺公園の河底池に至り、和気清麻呂による大和川付け替え掘削工事跡を確認しながら附属天王寺中学校に帰着した。



■参加者

生徒6名と教員5名

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------